

※朗読する際は、自分なりの文章のリズムを意識して、自由に読点「、」を打ち直してください。

## テキスト 4

### 『懐かしいひと』

8年ぶりに見かけたあおいは、高校近くの交差点で、凜とした表情で佇んでいた。

通勤路の途中、突然目にした光景に私は息をのむ。青空の下、あおいはまっすぐ前を見て、足早に横断歩道を渡っていく。桜並木に風が通りすぎ、二人の間に花びらが舞う。すれ違いざま、声をかけようかと思ったけど、どうしても勇気が出ない。その横顔に、大学の合格発表の日に見た笑顔が重なる。

何も変わってない、と胸が締め付けられるように感じた。高校3年間、部活もクラスもずっと一緒。何でも出来て可愛くて、自慢の友達。けれど今、遠くから眺めることしかできない。

——間違いない、あおいだ。なんで、この街にいるんだろう。

はやる気持ちを抑えつつ、私は考えを巡らせる。大学進学を機に上京したあおいは、東京の化粧品会社で働いていると、人づてに聞いてはいた。けれど、詳しい近況を知らず、罪悪感を覚える。8年前、同じ大学を受験して自分だけ不合格だった日から、徐々に距離を置いてしまったのだ。滑り止めの地元の大学に渋々行った私と違って、あおいは希望に溢れ、あまりに眩しかったから。

出勤後も、心は浮ついたままだった。彼女は、私に気づかなかっただろうか。気づいた上で、何もしなかったのだろうか。昔は些細なことでも分かち合ったのに、あおいの暮らしのひとかけらも、今の私は知らない。

——やっぱり、この珈琲が一番おいしい。東京にいても、たまに飲みたくなるんだよね。

帰り道、夕暮れ時の喧騒に身を任せ、あおいと最後に会った日を思い出す。高校時代、二人で通った純喫茶。その日あおいは、沈んだ表情を浮かべて、しきりに懐かしんでいた。東京で何かあったのだろうか。察しがついたけど、賑やかなキャンパスライフの話聞くにつれ、将来への不安に揺れる自分が情けなくなった。その後、連絡を取るのも会うのもやめると、高校時代の思い出は、埃を被ったまま胸に仕舞い込まれた。

——もう一度、あおいと話せるなら。でも……。

彼女を突き放した後悔が、仄暗い感情となって渦巻く。すれ違った交差点までやってくると、夕日の光が辺りを照らしていた。

翌朝、私は再び交差点に立ち、あおいを探す。勘違いだったのかもしれない、そんな思いも抱えて。

「お姉さん。このお店に行きたいんだけど、見当たらずで」

ふと、見知らぬおばあさんに道を尋ねられ、我に返る。店名に聞き覚えはなく、何も答えられない。

その時だった。

「おばあさん。そのお店、区画整理でなくなったんです。残念ですよ、良いお店だったのに」

傍らから声が飛んできて、私は目を見開く。少し高めで、すっと通る声。高校三年間、毎日のように聞いていた声だった。振り返ると、微笑むあおいがそこにいた。

「久しぶり、だね。元気だった？」

おばあさんが立ち去った後、あおいは呟く。大きな目が潤み、指先はかすかに震えているように見えた。青信号を知らせるメロディーが、二人を包み込んでゆく。

(了)